

第三位

「あなたがいてくれるから」を読んで

情報工学科三年 鈴木恵理

私はこの本を読み、命の大切さをつくづく感じた。命とは、それはとても素晴らしいものであるということ。

この本は、平成九年、十四歳の少年による犯行で、娘を失った母が書いた手記である。今でも毎日のように、テレビや新聞で、事件、事故、殺人などが起こり報道されている。聞かない日はないくらいである。この本を読み、命について考えると、とても悲しい。まして殺人は、相手の自由や夢を奪ってしまう。その人が、これから先やろうとしていた事、やりたかった事、その人のこれからの幸せから切り離してしまうものだと思う。家族にとっても、ついさっきまで一緒にいた人が、一瞬のうちにもの言わぬ姿になった悲しみは、加害者を恨んでも、恨みきれないものだと思う。

しかし、この本を読み感動したことは、娘を失った母が、奪った人を殺して仕返しをしたら、娘が喜ぶどころか、母が人殺しをした事に対して悲しむという事に気付き、自分の気持ちと戦い、みんながゆがんだ心を直していこうとしたところである。自分で自分と戦って、残酷な心と戦い、これをやっつける人間は成長していくのだとわかった。だから私も、自分と戦い、ささいな事では負けないようにしようと思う。

自殺についても同じである。誰でも「自分は何のために生きているのだろう」と思うことがあると思う。でもそこから、生きるという事はどんな事か、人間は何のためにこの世に生まれてきたのか考えてもらいたい。私もこの本を読むまでは、そのような事を考えた事はなかったが、親の子に対する愛情の深さを知り、親への感謝の気持ちは忘れてはいけないと思うようになった。

また、嫌な事から逃げるのではなく、死にたくなるほど苦しい思いをした時が、人間が本当に幸福になっていくチャンスであり、自分の人生を大きく変えていく時なのだと感じた。この世に必要な人間なんて一人もいないと思うし、価値のない人間も一人もいないはずである。自分には価値がないように思える時であっても、決めつけずに、自分で価値のある自分を作っていけばいいのだと思う。とはいえ、自分が困難な事を克服できるか

という自信はないが、精神的にお強い人間になっていきたいと思っている。

また、このような悲しい事件の犯人が、私の弟と同じ、十四歳の男子中学生だということにはショックを受けた。しかも、自分の勝手に身の知らない、ただ通りかかっただけの小学生の女の子を殺すなんて考えられない事である。その女の子の運命だと言ったらそれまでだが、あまりにやりきれない思いがする。まして、自分より弱い者をいじめるなどというのは、最低である。でも、その加害者の男の子にも親がいて、また兄弟がいるかもしれない。加害者だけでなく、加害者の親も、どれだけ悲しみ悔やんでいるか、はかり知れないと思う。

最近では、小学生による殺人も、新聞やテレビで耳にする。考えられないことだが、現実には起こっているのだ。もっと、知ってもらいたいと願わずにはいられない。

私はこの本に出会えて本当によかったと思う。大きな感動をもらい、そして命について学ばせてもらった。この気持ちを忘れずに、これからの人生、何事にもくじけず前向きに頑張っていきたいと思う。

そして、「生と死」について、痛ましい事件を、単なる悲劇に終わらせずに、一人でも多くの人に自分自身の「生と死」への探求の糸口へと変えてもらいたい。人間は素晴らしい命の底力を持っているのだから。